

ハフハフハー

身がまえなくていい

3年 A・Kさん

ほくがこの本を読んで気づいた事は、二つのし点があるという事です。一つ目は、自分にほかの人との方がいいがあるがわのし点(フハー)。もう一つは、相手のちがいをどう受け入れるかというし点(動物たち)。ほくはこのりょう方の気持ちに注目しました。なぜなら、どちらの立場にも自分をおきかえられるからです。

ほくがフハーだったら、持って生まれたドクのせいで友だちを作れないので、半分あきらめてしまうと思います。ですが、友だちを作ろうとど力したすがたにゆう気づけられました。そして、山犬たちから動物たちをまもったのは、今までいっしょになかよくしてくれた友だちへのおん返しではないかと思っています。

自分のわるい部分も時には人のやくに立つたり、だれかを助ける事ができると思い、わるい事だけではないと思いました。だからこそフハーは、ありのままの自分のすがたを受け入れることができるようになったのだと思います。

次にほくが動物たちだった場合、やはりた人が自分とちがうと感じるとさいしょは身がまえてしまうと思います。けれど動物たちは、フハーのことを気にかけて、ゆう気を出して話しかけ、友だちになるチャンスを作った所がすごいと思いました。そして山犬たちがいなくなった後、木のせんをしていないフハーといっしょにわらい合い、心からおれいを言いました。おたがいを受け入れたしゅん間なのかなと思ひ、わらい合うみんなの後ろに、きれいなじがかかっているように見えました。

人とちがう自分、自分とちがう人。それを受け入れるのは、かんたんなようでも、いっしょにわらい合える、それだけでいい、身がまえなくて大じょうぶ。そうほくは思いました。